「まちづくり学校方式」による 住民主体の計画策定手法について

—宮城県内の農村集落における実験—

On the Method of Planning by the Organization “Matidukuri-School”

Mainly Composed of the Inhabitant

—In the Case of a Farm Village in Miyagi Prefecture—

山田 晴義*・新川 達郎**・
谷津 憲司***・鈴木 孝男***

Haruyoshi YAMADA, Tatsuro NIKAWA,
Kenji YATSU and Takao SUZUKI

I 実験の背景と目的

わが国の農山漁村では、これまでに生活環境と生産基盤の整備は一通り達成され、一部を除いて農村の定住環境は著しく向上された。しかしながら、近年の社会・経済状況の変化とこれに伴う人々の要求の変化などから、従来からの整備の内容が農村の生活と生産を継続するために必ずしも満足なものとして評価されなくなってきた。このことは、従来からの農村整備の課題自体を見直さなければならないことに加えて、整備の内容を描き出すための計画方法を含めた整備の進め方についても考え直すべきであることを意味している。これまでは生産基盤から生活環境の整備に至るまで、国県の補助事業や起債により、自治体が中心となって計画策定から実施までのプロセスを担当することが多く、その過程で住民は定められた条件の中で意見を述べたり、既定のメニューの中から整備内容を選択することはできるが、事業の採択基準が優先され、住民が整備の方向や内容について自ら提案して実現する機会を保障されていないのが現状であるが、このような農村整備の進め方に限界が見えはじめたものと考えられる。勿論、戦前

までは多くの農村集落が共有財産などをもち、集落みずから集会施設や学校などの整備を実現してきたが、今ではほとんどこのような共同の仕組みは衰退し、集落の整備課題の解決に当たっては、多くを行政に依存するようになってきた。このような状況の中で、これからの農村整備に当たっては、従来のように行政が用意した仕組みのもとで行う農村整備で継続されるべきものも少なくなろうが、かつての農村集落が有していた共同の仕組みとは異なった方法で、住民要求を受け止め、これを実現していくための計画技術を高めなければならないと考える。

本報告は、上記の問題意識に基づき、住民が専門家の協力を得ながら、地域における課題を明らかにし、解決に向けての整備を実現するための計画策定の方法についての知見を得ることを目的としている。

II 実験の方法と対象の概要

1 実験の課題と方法

この実験は、上記の目的で、宮城県鳴子町の集落で一年をかけて行われた「まちづくり小学

* 岩手県立大学 Iwate Prefectural University

** 東北大学 Tohoku University

*** 東北工業大学 Tohoku Institute of Technology

Key Words : 1) 計画策定手法, 2) まちづくり学校, 3) 農村食堂, 4) 住民主体, 5) まちづくり講

校」^{注1)}の結果から検討を加えたものである。ここでは、行政の支援を前提にせず、また行政の提示する事業メニューにとらわれることなく、住民が主体的かつ共同で課題を実現するための計画策定の方法、特に計画策定組織とその運営方法について、実験的な事例を通じて検討する。

この実験での検討課題は、計画課題・内容についての考え方、知識、技術などを学びつつ、住民が主体的に計画策定を行う組織とその運営のあり方についての参考を得ることである。本報告は、これらの課題を明らかにするために、「まちづくり学校方式」による計画策定のための組織的な活動の実験結果から分析する。なお、本報告は計画策定組織の構成とプログラムの組み立て方などの知見を得ることを主な課題としており、ワークショップの現場における具体的な展開技術については他の研究に譲るものとする^{注2)}。

上記の課題について検討を行うために、このケースでは、参加する地域住民を「生徒^{注3)}」、専門家を「クラス担任」とした「まちづくり小学校」を開校し、課題別のクラス編成を行い、カリキュラムに従って計画策定を行うことにした。その具体的な方法は以下の通りである。

①計画策定のためのワークショップは、地域住民が参加しやすく、また活動しやすい環境で進められるべきあり、さらに、住民のもつ能力・エネルギーを最大限に引き出すものでなければならないと考えた。そのためには、計画策定に係わるメンバーが相互理解と信頼関係のもとで、専門家の指導を受けながら、必要な期間をかけ、計画策定の方法を学びながらワークショップを行うという形で実験を試みた。

②計画策定は、本来地域の課題を実現するために行われるものであり、従って課題自体ができるだけ実現性を感じられるものであることが有効と考え、その条件を満たすことのできる対象を選定した。また、実現性の高い計画策定を行うためには、課題にかかわるソフトからハードに至るまで総合的な計画内容が明らかにされるべきであり、そのためには必要な複数の専門分野について一貫したワークショップを展開する必要があると考えた。従って、必要な課題別にクラスを編成し、それぞ

れ専門家（担任）を配置して小学校の運営を行った。

③各クラス（各分野）の成果が、個々ばらばらに提示されるのでは実現に当たっての障害は大きく、従って各分野の成果が一つのプロジェクトとして統合される必要があると考えた。そのためのクラス間の連携の方法に配慮し、各クラスの成果が一つの計画として整合性と統一性を持てるよう、カリキュラム並びに学校運営の中で考慮した。

④実現性の高い計画策定を行うためには、実現の方法まで具体的に提示されるべきであり、従って、提示される計画に対して地域住民がどのように参加し、対応できるかを明らかにする必要があると考えた。そのために、ここではクラス別のワークショップに先立って、地域住民の生活時間と提供できる時間及び技能に関する調査を行う過程を用意した。

⑤地域や住民が抱えている問題や課題に対して、より適切な解決方法を提示するためには、地域住民と専門家が、それぞれの知識と情報を提供しあい、お互いの能力が充分引き出される関係が重要であると考えた。そのために、課題別に地域住民と専門家のチームによるクラスを編成し、必要と思われるカリキュラムを用意した。

⑥住民の要求と能力を引き出すためには、ワークショップが行われる段階で、補助事業など住民の要求に影響や既成概念を与える要素ができるだけ少ない状況で実験が行われることが一層効果的であると考え、対象の選定に配慮した。

2 対象地域の概要

実験の対象集落は宮城県鳴子町の川渡と石の梅である。鳴子町は宮城県の北西部にあり、秋田県と山形県に隣接する中山間地域である。町の人口は10,236人、世帯数は3,368世帯（平成8年3月末の住民基本台帳による）で、町面積の90%以上が山林・原野である。仙台市までは約65km、広域生活圏の中心市古川市までは約30kmであり、国道47号線で結ばれている。（図1）

川渡は、上記国道に面して鳴子町の古川市方面からの入り口付近に位置する集落であり、古くから秋田や山形を結ぶ交通の要衝であるとともに、

図1 対象集落の位置

湯治場としての起源も平安時代に遡り、町内でも最も古くから開けた地域である。近年は、大型観光ホテルが多く立地する町中心部の温泉街に客を奪われ、地域の特性を活かした温泉場の再生が求められている。集落の世帯数は205戸で増加の傾向にあるが、人口は638人で減少傾向にある。農家数は20戸に満たない。

石の梅は、戦前は軍用馬の飼育を中心に、背後の山林や狭隘な農地を基盤とした農林業を営む農村地域であったが、昭和40年頃から温泉の掘削が行われるようになり、農林業のかたわら湯治宿を営む者もでてきた。近年では農地の宅地化やロードサイドショップの進出が進み、国道沿いを中心に、農村の環境が失われつつある。世帯数は65戸、人口は243人であり、近年はあまり増減がみられない。農家数は約半数である。

3 対象の選定経過

本実験の対象は、課題を明らかにするために上述した条件に適合する地域住民の集団を選定した。「石の梅」では、地域内に流域下水の処理場計画が持ち上がったことを契機に、平成4年末に集落の30～40歳代が中心となって「石の梅のまちづくりを考える有志の集い」が開かれ、平成5年3月

にはこれを「石の梅まちづくり創造研究会」と命名し、15名で任意団体を組織して活動をはじめた。メンバーは、湯治旅館や小売り商店の経営者、農業者、公務員、会社勤めの者など地域の多様な層から構成された。この団体は、集落の環境や地域資源を活かしたまちづくりを行うための学習活動を行う過程で、多分野の専門家との交流活動もはじまり、平成5年には学習、講演会、交流活動、視察研修、イベントなどあわせて34回、平成6年には43回の活動を行ってきた。専門家や都市住民との交流で農産物や郷土料理の提供を行う時に、地域の婦人や高齢者が活動に加わるようになり、このたびの「まちづくり小学校」への参加の土壌が形成されていた。筆者らは、このような活動を知って、平成6年2月に行われた宮城県による農村リゾート調査^{注4)}を機に、上述の創造研究会のヒアリングを行い、この時に策定された構想を参考にしつつ、改めて住民が主体となって具体化するための計画を策定する目的で、「まちづくり小学校」によるワークショップを提案して実現したものである。なお、実施にあたり、石の梅の住民の要請で、急きょ同集落と隣接して歴史的にも結びつきの強い川渡集落を含めて行うことになったが、両者の間に目的やテーマなどについて十分な合意が得られないまま始められたことから、一部のクラスで意図した運営を行うことができなかった。ここでは、本計画策定方式の参考とするために、この問題点等についても触れる。

Ⅲ まちづくり小学校の構成とフロー

1 計画課題とクラス編成

「まちづくり小学校」で策定される計画課題は、平成5年度に策定された「農村リゾート調査」の結果提案された、①新しい感覚の湯治場リゾート環境の整備、②もてなしの場としての農村食堂の整備、③もてなしの場にふさわしく、また気持ちよく暮らせる美しい農村環境の整備、の3つである。

この課題のなかで、参加者（以下「生徒」とする）の関心が最も高いのは、農村食堂であり、こ

れまでの交流活動のなかですでにその整備が求められていた。しかしながら、高齢者を除くと大半は就業の場を確保しており、参加者は、楽しみながら副業に結びつけられる場を求めている。また、経営のためのリスクを最小限にすることが前提であり、そのためには一般の食堂とは異なった運営

図2 クラス編成

・経営組織のあり方を探ることが重要な課題となった。

以上の課題を受けて、クラス編成は①温泉研究クラス、②農村食堂研究クラス、③まちなみ景観研究クラス、④住民活動研究クラスの4クラス編成とした（図2）。温泉研究クラスは、新しい湯治リゾートの姿を提案することを目的とした。農村食堂研究クラスは、地域の食材を活かした食事の開発とその提供方法の提案を目的とした。まちなみ景観研究クラスは、快適な農村景観の整備と遊休農地の活用、さらに、農村食堂の配置を含む集落整備計画の提案を目的とした。住民活動研究クラスは、農村食堂と集落環境の維持・運営を継続的に行っていく組織とその運営方法の提案を目的とした。上記の各クラスにそれぞれの分野の専門家を1名づつ配置した。また、まちなみ景観研究クラスには東北工業大学建築学科の学生などが、また、住民活動研究クラスには市民団体である「仙台NPO研究会注5）」のメンバーが協力した。

事務局は、「石の梅まちづくり創造研究会」のメンバー2名と宮城県地域振興センター研究員3名が担当した。校長は山田が担当した。

表1 参加者の年齢構成

(単位：%)

年代	20代	30代	40代	50代	60代	70歳以上	合 計
性							
男	1 (2.8)	9 (25.0)	11 (30.6)	8 (22.2)	5 (13.9)	2 (5.6)	36 (100)
女	0	2 (13.3)	7 (46.7)	3 (20.0)	3 (20.0)	0	15 (100)
合計	1 (2.0)	11 (21.6)	18 (35.3)	11 (21.6)	8 (15.7)	2 (3.9)	51 (100)

表2 参加者の職業

(単位：%)

職業	農業専業	会 社 員	公 務 員	団体職員	自 営	無 職	合 計
性別							
男	1 (2.8)	9<4> (25.0)	5<2> (13.9)	0	17<1> (47.2)	4 (11.1)	36<7> (100)
女	3 (20.0)	3<2> (20.0)	2<1> (13.3)	1 (6.7)	4 (26.7)	2 (13.3)	15<3> (100)
合計	4 (7.8)	12<6> (23.5)	7<3> (13.7)	1 (2.0)	21<1> (41.2)	6 (11.8)	51<10> (100)

(< >内は農業との兼業・再掲)

2 参加者の構成

まちづくり小学校の生徒は51人で、性別は男が36人、女が15人である。年齢別では最低28歳、最高85歳で、40代を中心に30代から60代の層が多い。（表1）

職業別では、自営が41%を占めて多く、次いで会社員、公務員、無職の順に多い。農業専従者は8%であるが、他の仕事の合間に農業に携わる者が10人含まれ、農業に携わる者は全体で27%になる。このように、生徒の構成は自営、農業、通勤

就業者の3つの職層からなる。(表2)

3 参加者の特性

住民の持つ能力や活用できる時間などの把握は重要である。この実験では、まちづくり小学校などの地域の活動に参加できる時間帯やそれぞれの特技、家庭内で活用できる道具などについて、学校のスタート前に「入学試験」という形で生徒に対してアンケート調査を行った。

活動に参加可能な時間が持てる曜日について聞くと、51名中14名が日曜日或いは土日と答え、このほかにも他の週日と土曜又は日曜日と言う者が3名含まれており、休日に活動可能とするものがかなりを占めている。8名は他の土日以外の1日から3日間を挙げている。他の26名は不特定或いは答えられないとしている。

生徒の持つ特技については様々で、回答例を羅列すると、「漬け物や餅料理」、「わら細工」、「野菜づくり」などの生活の知恵や「石積み・木工」、「調理師の資格」、「測量士の資格」、「書道と設計」、「大工仕事」、「登記事務」、「経理事務全般」などの職業としても活かせる知識・技術から「昔話」、「馬の世話」なども含まれており、これらの能力を活かすことを考慮しながらクラスの活動や計画の策定が行われた。

また、各家庭で眠っている「道具類」も様々であるが、代表的なものとしては、契約講などの集まりの際に使用されていた30組の漆塗りのお膳やお椀などのセットがあり、実際に農村食堂研究クラスの活動で使用された。

これらの参加者の生活時間や特技に関する調査の結果から、住民の時間や能力をつなぎ合わせて全体を構成していくような農村食堂などの運営が重要であることが示唆され、学校運営や計画内容に活かされた。

4 まちづくり小学校の運営フロー

まちづくり小学校の企画から運営に関する一連のフローは図3に示す通りであるが、生徒と担任が共同で行った活動は図中太字で示した「まちづくり小学校への準備登校」、「入学式」、「授業と補講」、「学芸会と卒業式」である。図に示したほか

図3 まちづくり小学校のフロー

にも、必要に応じて各行事の間には事務局メンバーだけによる打ち合わせや校長・担任などと事務局メンバーによる運営会議ともいべき打ち合わせが何度か行われている。

フローに示す「準備登校」までは、事務局メンバーと担任グループが協議して、小学校全体の年間プログラムを検討した。地元側の事務局メンバーが中心になり、集落の集まりの機会を利用して参加を募るために説明を行った。

準備登校では、小学校への参加希望者全員に対して、小学校の目的と進め方並びに予定している各クラスの学習内容の説明に加え、入学試験と称して先に述べた自由時間や得意技などの調査を行った。その上で生徒の要望を踏まえてクラス編成案を作成した。入学試験として行われた調査は、事務局で回収して集計した。

入学式は、入学試験結果（調査の集計結果）の報告を行い、これにもとづいて最終的なクラス編成が行われ、担任からそれぞれのクラスの学習目標・進め方の説明が行われ、いわゆるオリエンテーションを実施した。準備登校と入学式・オリエンテーションのあとには交流パーティが催され、これらを通じて生徒と担任がお互いの考え方や要求を理解し合う機会となった。

各クラスの運営は、はじめに担任からクラスの学習方法の進め方について説明が行われ、2回目からはそれぞれ実践的な活動に入っている。各クラスの活動内容については後に示す。各クラスの学習には、必ず事務局員2名（地元1名、地域振興センター1名）が出席して活動の準備その他の世話をするとともに、活動結果を翌日には「まちづくり小学校ニュース」にまとめて発送した。このニュースは、担任と生徒全員に配布し、他クラスの活動状況を把握できるようにした。また、欠席者にとっても次回の活動に支障なく参加できることになり、小学校の運営上重要な役割を果たした。

Ⅳ 各クラスの運営方法と結果の概要

1 各クラスの概要

(1) 農村食堂研究クラス

農村食堂研究クラスでは、地域における山沿いの狭小農地や近傍の山々から収穫される少量・多品種の食材を使い、農村食堂で湯治客やその他の訪問者に地域性のある「食」を提供することである。これによって小規模農業の市場外における消費の場を確保し、同時に地域住民の副業の場を確保していこうというものである。クラスのメンバーは12名で、1名を除くと全て女性であった。

農村食堂研究クラスでは、第1回目の授業に、

地域の食材に関する記憶の収集と称して、地域の食材についての学習をしながら、その掘りおこしの活動を行っている。具体的には、現在採集する、或いはかつて採集された山菜、果実、ハーブなどを抽出した。その結果現在農地で生産されている農産物を除いても、23種類の食材の存在が確認され、更に、家族などからの聞き取りにより補充する必要性が確認された。

第2回目と3回目の授業は、農村食堂のメニューを考える、と言うテーマで検討が行われ、計画課題を具体的に検討するとともに、その結果に基づいて宿題として自宅で料理を作り、次回に持ち寄った。第2回目は、農村食堂で湯治客と日帰り客に旬の特色ある料理を提供すること、それは、朝、昼、夜のそれぞれの提供時間帯に応じたメニューづくりが必要であるとの結論が出され、朝はパン、昼はおにぎり、夜は餅料理とそれぞれにあわせた料理を作ることが提案された。

第3回目の授業は、宿題であった「おにぎり」を生徒が作って持ち寄り、22種類の試作品が提示された。併せて、それぞれの空き時間を活用して料理を持ち寄る形式で経営しながら、副業を形成していく方法が検討された。

第4回目の事業では、第3回目と同様にそれぞれ朝食メニューとしてのパンを焼いて持ち寄り、併せて多様な食材によるジャムやパテ類並びに野菜の添え方など多様な試作品が提示された。

夕食メニューの餅料理は、全体の卒業式の日に持ち寄ることになり、21種類の餅料理が提出され、卒業パーティーが試食の場として活用された。また、食器は地域の伝統的な鳴子漆器のお膳30組が使用され、食材以外の資源との結びつきの重要性が提示された。

これらの学習の結果、この地域における農村食堂の経営方式は、図4に示すように、僅かの専従者と複数の家庭からの持ち寄りによる方式が提案された。

(2) まちなみ景観研究クラス

まちなみ景観研究クラスでは、答えを導き出す過程を生徒が共有し、策定技術を可能な範囲で身につけ、今後の活動の場で活用できるように心がけた。そのためのカリキュラムを図5に示す。景

観研究クラスのメンバーは14名であり、全員が男性であった。

第1回目は、景観整備の考え方に加え、生徒自らが景観の点検をする意義とその方法について担当が講義を行った。

第2回目は、集落景観の点検を行った。点検作業は、生徒2名とサポーター（担任、大学生、大学院生のいずれか）1名の計3名を1チームとして5チーム編成により、チームごとに地図への記入とそのポイントの写真撮影を行った。当日中にその結果を集会所に持ち寄り、5チームの結果を報告しあった。その結果は、後日大学院生らが1枚の点検地図にまとめ、生徒は宿題として写真撮影の位置と撮影の意図について整理することになっ

た。

第3回目には、集落で保存したり活かすべきポイント、改善すべきポイント、除去すべきポイント、その他のコメントを、1枚の地図上に書き込み、また前回に整理された点検地図をもとに、整備・改善課題を議論し、その結果をさらに地図上に書き込んだ。その過程で、数々の地域資源に加えて、集落内に残る居久根（いぐね）^{注6}を持つ屋敷と遊休未利用地の存在が確認され、それらの活用が提案された。その結果、第4回目には、居久根を持つ屋敷（注6に示す理由から、以後屋敷全体を「居久根」と呼ぶ）の現地調査を行うこととし、「居久根」と遊休未利用地の分布調査は生徒の宿題となった。

図4 農村食堂の構成イメージ

第4回目は、集落内の規模の大きな「居久根」の踏査をおこない、持ち主のヒアリングと併せて、屋敷内で生産されてきた食材とその利用方法について把握し、地域への来訪者や交流対象者の体験活動や環境教育の場として有効であることが確認され、「居久根」の活用方法について検討を行った。

第5回目は、4回までの成果と宿題を持ち寄って、集落景観整備のあり方、遊休農地の活用方法、農村食堂の配置の検討を行い、その検討内容を地図上に記録した。

第5回の検討結果は、大学院生らが計画図として清書し、これを学芸会の場で生徒が発表した。

(3) 住民活動研究クラス

住民活動研究クラスは14人で構成され、そのうち3名が女性であった。第1回目は地域における組織活動の分析を歴史的に行い、現在も残されている契約講の仕組み、問題点、現代的な意味などの分析を行った。地域が行っている交流活動の現状分析も行った。

第2回目は、入学試験に行われた生活時間調査とそれぞれの得意

図5 まちなみ景観研究クラスのカリキュラム

図6 「まちづくり講」による農村食堂運営の提案

技などの整理を行い、これらを農村食堂経営のために、どのように組み合わせていくべきかの検討を行った。

第3回目は、農村食堂などを経営していくための組織形態、採算と利益の還元・分配方法、行政や都市住民との連携のあり方について検討が行われた。

第4回目は、これまでの検討成果から、農村食堂の運営と集落環境整備・維持のための「まちづくり講」(図6)の組織形態をとりまとめた。

(4) 温泉研究クラス

温泉研究クラスは、男11人、女1人でスタートし、第1・2回目は、地域の温泉の特徴や活用上の問題把握などを行ってきたが、第3回目で、新たな湯治のスタイルを検討する段階になり、川渡が由緒のある温泉としての歴史をもち、一方石の梅が農業との兼業で片手間に湯治宿を経営してきたという歴史的条件の違いから、双方の考え方の差が明確になり、その溝を埋める術を用意できなかった。つまり、川渡が急きょ参加することになり、両者の間に目的やテーマなどについて十分な合意が得られないまま始められたことに問題があった。このような状況から、クラスの活動内容は限

定され、第4回目には重曹泉を使った豆腐づくりを行ったが、計画課題から離れた結果となったことは否定できない。本計画策定方式の一つの反省点として参考にすべきである。

2 担任と生徒の情報交換の概要

まちづくり学校方式の目標の中に、住民と専門家の間の相互学習の実現を挙げたが、表3にはお互いに提供しあった情報の概要を示した。このような情報交換によって、専門家の提供した情報に基づいて住民が反応し、計画策定に欠かせない重要な情報がクラスの活動の中で提供され、これを採用しながらクラスの運営がおこなわれた。

IV 参加者の意識と評価

1 把握の方法と対象

まちづくり小学校終了の3ヶ月後に、生徒全員に対してアンケート調査を実施した。調査票は各集落の集まりの機会に関係者に依頼して配布・回収をおこなった。調査票は無記名で回答を求めた。回答数は35名であり、生徒の67.3%の回答を得た。

回答者のうち17名が川渡、18名が石の梅である。性別では23名が男で、女は11名、不明1名であるが、性別の回答率は、男が63.8%、女が73.3%である。回答者が参加したクラスは、温泉研究クラスが参加者11名中6名、農村食堂研究クラスが12名中8名、まちなみ景観研究クラスが14名中12名、住民活動研究クラスが14名中8名、不明は1名であった。なお、サンプル数が少ないため、以下のパーセンテージはあくまで参考として示す。

回答者の年齢構成は、40代が18名（51.4%）で半数以上を占め、次いで60代が6名（17.1%）、30代と50代がそれぞれ4名（11.4%）、70代が1名であった。回答者のクラス別属性を、居住地、性別、年代について表4に示す。

2 参加意識

生徒の参加意識を把握するために、まちづくり小学校に参加する際の状況を聞くと（表5）、「進んで参加」と「人に勧められて」がそれぞれ40%ずつを占めているが、川渡では「人に勧められて」が59%と多いのに対して、石の梅では「進んで参加」が61%を占めて多い。授業や宿題などの作業への出席状況（表6）からも参加意識を読みとることが出来るが、「殆ど出席した」のは49%で、「半分程度の出席」が26%である。その他の26%は「あまり出席しなかった」か「全て欠席」である。「殆ど出席した」のは、川渡が35%であるのに対して、石梅では61%に達している。このように、まちづくり小学校が組織されるまでの活動に対する取り組みの違いによって、参加意識が大きく異なることがわかる。

表3 情報交換の内容

クラス名	担任からの提供情報	生徒からの提供情報
農村食堂研究クラス	①宮城県江合川流域における伝統的地域食材調査の結果 ②観光客の行動特性 ③地域における一般的な食材加工のノウハウをはじめとする生産・生活の知恵の存在（高齢者などの知恵ほか） ④料理の提供方法（メニュー、デザインなど）	①地域食材の生産状況 ②地域の高齢者の持つ食材加工事例・ノウハウの紹介 ③家庭で利用されていない食器など（漆のお膳のセットなど）
まちなみ景観研究クラス	①地域の環境資源の再評価の重要性 ②町並み環境点検の方法 ③点検結果のとりまとめ方 ④討論の方法と結果のまとめ方 ⑤地域の環境資源活用の可能性	①地域の環境資源の紹介・案内 ②居久根の特性紹介 ③遊休農地の情報提供と分布図の作成
住民活動研究クラス	①住民組織活動の重要性と事例紹介 ②トラストなどの運営・経営方法の紹介 ③経営の試算	①地域における「結い」「講」などの状況 ②地域における人材の状況
温泉研究クラス	①近年における温泉施設の事例紹介 ②担任の朝日町における温泉施設整備の経験事例の紹介 ③温泉の効用・効能の多様性、有効性など ④温泉を利用した特産形成の事例	①地域の温泉の歴史、特性 ②温泉豆腐の試作

表4 アンケート回答者の属性

（上段実数、下段%）

クラス別	集落別 (川渡)(石梅)		性別 (男)(女)(不明)			年齢別* (49)(50 59)(60)				合計
農村食堂	4	4	1	7	0	0	7	1		8
	50.0	50.0	12.5	87.5			87.5	12.5		100
まちなみ景観	5	7	10	2	0	2	5	5		12
	41.7	58.3	83.3	16.7		16.7	41.7	41.7		100
住民生動	3	5	6	2	0	2	1	5		8
	37.5	62.5	75.0	25.0		25.0	12.5	62.5		100
温泉	4	2	6	0	0	1	3	2		6
	66.7	33.3	100			16.7	50.0	33.3		100
不明	1	0	0	0	1	0	1	0		1
	100				100		100			100
合計	17	18	23	11	1	5	17	13		35
	48.6	51.4	65.7	31.4	2.9	14.3	48.6	37.1		100

注：*年代の最低は30歳代、最高は80歳代

3 学校方式の評価

まちづくり小学校に対する評価を聞くと（表7）、「成果なし」という回答は皆無であるが、「分からない」は4名であった。成果の内容では、「まちづくりの方法全般の勉強ができた」が26%と最も多く、次いで「自分たちのまちづくりの方向が

表5 参加の経緯 (単位: %)

参加の経緯 集落	自ら進んで参加した	人に勧められて参加	どちらとも言えない	無回答	合計
川 渡	3 (17.7)	10 (58.8)	4 (23.5)	0	17 (100)
石 の 梅	11 (61.1)	4 (22.2)	2 (11.1)	1 (5.6)	18 (100)
合 計	14 (40.0)	14 (40.0)	6 (17.1)	1 (2.9)	35 (100)

表6 まちづくり小学校への出席状況 (単位: %)

出席状況 集落	殆ど出席	半分程度出席	あまり出席せず	全く欠席	合計
川 渡	6 (35.3)	5 (29.4)	4 (23.5)	2 (11.8)	17 (100)
石 の 梅	11 (61.1)	4 (22.2)	3 (16.7)	0	18 (100)
合 計	17 (48.6)	9 (25.7)	7 (20.0)	2 (5.7)	35 (100)

表7 まちづくり小学校の成果 (単位: %)

成果*2) 集落	まちづくり全般	自分たちの方向*2)	自らの方向*2)	計画づくりの技術	住民間の交流	町外の人との交流	成果は分らない	無回答	合計
川 渡	3 (17.6)	2 (11.8)	4 (23.5)	2 (11.8)	2 (11.8)	0	3 (17.6)	1 (5.9)	17 (100)
石の梅	6 (33.3)	5 (27.8)	2 (11.1)	1 (5.6)	1 (5.6)	1 (5.6)	1 (5.6)	1 (5.6)	18 (100)
合 計	9 (25.7)	7 (20.0)	6 (17.1)	3 (8.6)	3 (8.6)	1 (2.9)	4 (11.4)	2 (5.7)	35 (100)

*1) 設問では「成果無し」を用意したが、回答者はいなかった
 *2) 設問では、「まちづくりの方向について」と限定した

表8 まちづくり小学校の感想 (単位: %)

感想* 集落	楽しくできた	うまく混じれず面白くなかった	どちらとも言えない	無回答	合計
川 渡	11 (64.7)	1 (5.9)	4 (23.5)	1 (5.9)	17 (100)
石 の 梅	16 (88.8)	0	1 (5.6)	1 (5.6)	18 (100)
合 計	27 (77.1)	1 (2.9)	5 (14.3)	2 (5.6)	35 (100)

*) 設問では「作業や宿題が負担であった」「義務感で負担を感じた」を用意したが、該当の回答は見られなかった。

分かった」、「自分のやるべきことが分かった」が多い。このように、この学校方式の成果としては、まちづくりの個別の技術よりは、まちづくり全体の学習が出来たことと、地域や自らのまちづくりの課題が見えてきたことなどが評価されているものと考えられる。

また、評価を活動の楽しさの面から聞くと(表8)、77%が「楽しくできた」と答え、特に石の梅では89%と高い割合を示している。「面白くなかった」は1名、「どちらとも言えない」が5名で、この二つの回答を合わせると、17%になるが、その大半が川渡の回答者である。このように、参加までの経緯が、活動に対する意識に影響を与え、結果的に楽しんで活動できるかどうかまで左右していることが分かる。

4 実現性についての評価

得られた計画の成果が実現性を持ち得るかどうかを判断するために、生徒の評価を求めた(表9)。

質問は「農村食堂」、「まちなみ整備」、「まちづくり講」の3つの成果について、実現の見通しを聞いた。「農村食堂」については、「実現は困難」としたのは6名(17%)で、一方「実現可能」は2名(6%)と僅かであるが、27名(77%)が「努力次第で実現可能」としており、実現に対して一定の展望を持ってい

表9 実現性に対する評価

評価 計画内容	実現は容易だと思	努力次第で可能と思う	実現は困難だと思	無回答	合計
農村食堂	2 (5.7)	27 (77.1)	6 (17.1)	0	35
まちなみ整備	4 (11.4)	27 (77.1)	4 (11.4)	0	35
まちづくり講	2 (5.7)	29 (82.9)	2 (5.7)	2 (5.7)	35

るようにみえる。なお、この設問に対する回答の傾向は、二つの集落の間に殆ど差が見られない。

「まちなみ整備」と「まちづくり講」についても、おおむね同様の傾向が見られるものの、どちらも「努力次第で実現可能」の割合が石の梅で高い。

表10 農村食堂への参加意向

(複数回答、下段は回答者数に対する%)

(単位: %)

参加の内容 集落	食 材 の 提 供	料 理	経 営 や 業	交流活動 や 芸 能	まちなみ や 環 境 整 備	特になし	無 回 答	合 計
川 渡	1 (5.1)	4 (23.5)	2 (11.8)	4 (23.5)	4 (23.5)	4 (23.5)	0	17 (100)
石 の 梅	2 (11.1)	4 (22.2)	1 (5.5)	3 (16.7)	7 (38.9)	1 (5.6)	1 (5.6)	18 (100)
合 計	3 (8.6)	8 (22.9)	3 (8.6)	7 (20.0)	11 (31.4)	5 (14.3)	1 (2.9)	35 (100)

5 実現に向けての参加意向と課題

農村食堂が実現した場合に参加できるかどうかを聞いた結果(表10)、「参加する意義なし」と答えた者はなく、「特に協力することがない」も5名(14%)にとどまっている。また、参加・協力出来る内容は「まちなみや環境整備」と答えた者が多く、これらは間接的参加の意向を示しているものと考えられる。しかし、「料理で参加」、「経営や営業で参加」も合わせて11名おり、これらは直接的参加の意向として捉えることができる。

実現にむけての課題は(表11)、「中心になって担当する人の確保」(46%)、「経営組織の具体化」(34%)を挙げるものが多く、「建物・設備の整備」や「食材の確保」などを上回っている。

V まとめ

この度の実験結果から、まちづくり学校方式の運営組織、プログラムとその展開方法などを中心に考察を下記にまとめ、住民主体による計画策定方法の参考としたい。

①この度の「まちづくり小学校」は、その開校前に活動の中心となる住民活動組織が存在し、計画課題や学校の進め方など企画の検討をはじめ事前の協議を行うことができたことが実験の成果に大きく影響したと考えられる。また、この組織のメンバーが他の地域住民に参加の呼びかけや説明を行ったこともスムーズに学校をスタートさせることができた要因である。従って、準備段階において、地域の担い手やそれらの組織についての情報

表11 農村食堂実現のための課題

(複数回答、下段は回答者数に対する%)

課題 集落	担当する 中心人物	メニュー の 研 究	建物や設 備の整備	経営組織 の具体化	食 材 の 生産供給 体 制	合 計
川 渡	9 (52.9)	0	2 (11.8)	7 (41.2)	2 (11.8)	17
石 の 梅	7 (38.9)	2 (11.1)	5 (27.8)	5 (27.8)	2 (11.1)	18
合 計	16 (45.7)	2 (5.7)	7 (20.0)	12 (34.3)	7 (20.0)	35

把握とその状況に合わせた運営方法の検討が必要であり、更に、これら地域の組織を交えた企画の策定、地域住民への働きかけなどが重要であることが確認できた。

②この実験に先立って行われた生活時間調査と得意技調査、家庭に眠る宝物調査の結果が、地域の人・モノ・その他の資源をつなぎ合わせて農村食堂を成立させるという提案を導き出し、計画内容に影響を与えた。このように、運営方法の検討・準備段階において、課題に対応した調査を実施し、情報収集を行ったことの成果が確認された。

③学校の運営組織では、クラス編成、担任構成とそのチーム、事務局の構成が重要であることが確認された。クラス編成については各クラスにおける生徒側の担い手の配置が有効であることが確認された。担任は各クラスにそれぞれの分野の専門家を配置したこと、同時に担任相互に相談連絡のとれる関係であったことが効果的であり、このような担任側のチーム編成も重要であることが確認された。事務局はクラス間あるいは担任との連絡調整、情報交換、スケジュール管理の役割を果た

し、その重要性が確認された。特に、クラスの活動が行われた翌日に概要を示すニュースが全員に配布されたことは極めて有効であった。

④この実験では、上記の組織のほかに、担任が所属する大学の学生や市民活動組織が、集落点検や討論への参加並びに調査・検討結果の整理などの作業の分担をしたことも活動をスムーズにし、策定成果の質を高めることになった。従って、生徒や担任を取り巻く人的資源の活用も重要であることが確認された。

⑤クラスの運営プログラムについては、住民による宿題の実施とその成果を活用してのクラス授業の展開、授業後のクラス間の交流機会の確保、地域の現場に出た活動メニューなど、地域の環境や状況に合わせた展開が有効であることが確認された。

⑥参加者（住民）と専門家によるクラス編成による現場での実践的なワークショップは、参加者の活動技術の向上に結びついたと考えられるが、専門家側にとっても「居久根」が継承してきた生活・生産の智慧や正確な遊休農地の把握とその利用の可能性など、地域の外部からでは得にくい計画情報などを得ることが出来、本方式による住民と専門家の相互学習の意義が確認された。

⑦入学式や卒業式などの全クラス共同で行う活動の他に、4つのクラスの授業の多くが同一日に、同一施設^{注7)}内あるいはその付近で別々に行われ、各クラスの活動後に交流会が行われるなどによって、クラス相互のコミュニケーションが保たれることになった。このように、クラス別活動と全体活動との組み合わせや活動環境に対する配慮が重要であることが確認された。

⑧この実験では、実験後の参加者の意識の変化や精度の高い評価について、必ずしも十分に把握することができなかったことが反省点としてあげられる。また、策定された計画について、農村食堂研究クラスに所属した婦人や各クラスの担い手層（主に「石の梅まちづくり創造研究会」のメンバー）には、実現に向けて意欲の高まりを確認することができたが、本実験の過程で、その他の生徒を担

い手として形成していくためのプログラムを意識して用意することができなかったことも、今後の課題として残された。

注

注1) この実験は(財)宮城県地域振興センターの平成7年度自主研究「住民参加による農村都市交流のあり方を探る(中山間地域の活性化方策に関する調査)」としておこなわれたものに、事後のアンケート調査、ヒアリング、資料収集を行い、同センターの了解の上で検討を加えてとりまとめたものである。

注2) ワークショップの現場における技術については、「村づくりワークショップのすすめ」(農村工学研究57・1994.3/(財)農村企画開発委員会)などに優れた報告がある。

注3) 本来小学校では児童とすべきであったが、参加者が全て成人であることから便宜上「生徒」とした。

注4) 宮城県企画部リゾート対策室からの委託調査「みやぎ農村リゾート形成調査」を財団法人宮城県地域振興センターが受託し、同調査委員会委員長を山田が担当したが、この段階では、補助事業の導入など実現性についてはまったく見通しはなく、あくまで基礎調査のレベルであり、地域住民も実現については全く期待していなかった。

注5) 仙台NPO研究会は、平成5年度に筆者ら研究者と仙台市などの自治体職員、コンサルタントなどが、まちづくりなどの主体形成の共同研究のために組織した任意団体。会の代表は山田。

注6) 居久根は、主に伊達藩の屋敷に見られる防風林を指すが、屋敷内には自給のために様々な木の実や果樹のほか、山菜、きのこ、野菜などが植えられており、これらの栽培や保存のための豊富な知恵が育まれてきたこの屋敷全体を居久根と呼ぶこともある。

注7) 屋外で行われる活動を除いて、大半の活動の場は石の梅集落の集会所か参加者の経営する旅館であり、相互に徒歩で行き来が可能な距離にある。

(1997年5月6日 受理)

(1998年6月5日 再受理)